

【 8 】

氏 名	越 智 武 臣 お ち たけ おみ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 36 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	近代英国の起源

論文調査委員 (主 査) 教授 井上智勇 教授 前川貞次郎 教授 今津 晃

論 文 内 容 の 要 旨

著者は本論文において、近代英国を、かつてわが国の研究者が偏狭な国家主義的史観から、英国国民の民族的欠陥を暴露したり、あるいは近代を謳歌して近代的発展の典型を英国にみようとするが如き立場を離れ、英国を対象化して、その客観的特質を把握しようとする。

本論文は全体として3章に分かれ、各章また3節にわけてそれぞれの主題について論説する。

第1章「政治変革の進展」は政治的面から「近代英国」の成立過程を明らかにしようとする。即ち著者は、中世と近代とのちがいを近代における国民国家の成立にありとし、国民国家の自覚的形成は国際関係を前提とすると考え、1494年の「イタリア戦争」に注目する。イギリスもこの時点にはじめて近代国家として自覚しはじめたことを論説する。さらに著者は、上にのべたような自覚が宗教改革を通じて、議会の制定した法は、王と臣民をひとしく拘束する、という考えが芽ばえたこと、つまり「法主権の独立」が成立して来たことを論証する。この点は従来の研究では殆んど論じられなかった点で、著者の史眼によって掘り当てられた新しい事実の一つである。ついで著者は政治のダイナミックとして政治におけるリーダーシップの問題をとらえ、トマス・クロムウェルの登場が、英国の近代国家としての覚醒と、英国宗教改革が世俗的性格をとるに至ったことと如何に深く関連するかを論説する。さらに著者は、通常、絶対主義が官僚制と常備軍の上に立つという俗説に反し、英国絶対王政を支える「宮廷」「派閥」の実態を検討して、絶体王政が派閥均衡の政治であると主張する。そしてこの中央の宮廷にむすびつつなおかつ独自の存在であった議会の革命的役割に注目し、現地調査の生の史料によって、従来革命が階級闘争であったという通説を批判し、実態はむしろ地方の有力家族間の闘争であったことを実証する。

第2章「社会経済の変貌」で著者はまずヨーロッパ国際経済のなかでの英国経済をとりあげ、すでに国民経済の中心となった毛織物の輸出関係を数量的に検討する。それによって16世紀前半が飛躍的好況であったのに対し、16世紀後半が大不況にみまわれていることを明らかにし、その原因を通貨の改悪つまり、monetary manipulationに見出した。この見解も著者独自のものである。さらに著者はこの経済的傾向

の中から、16世紀前半におけるヨーマンが困込運動の進展とともに没落したことをあとづけた。これも従来の「ヨーマンを近代のトレーガーとみる」通説に対する著者の新しい見解といえる。そして「英国近代のトレーガー」をジェントリーにおいて見出す。第3章「国民文化の生成」はまさにこのジェントリー研究である。

第3章において著者はまずジェントルマン＝イデアールの形成に着目し、それが中世騎士道理念とルネサンスとともに入ってきた人文主義的理念との結合の上に成立したことを主張する。そしてこのジェントルマンの行動様式の形成場所としてパブリック・スクール、オックスフォード、ケンブリッジ大学の役割を解明する。著者はついで英国文化の重要な造形要素たる清教主義に着目し、それについての一般的解釈の根底となっているマックス・ウェーバー説を批判する。著者はウェーバー理論の根拠となった史料バクスターの「キリスト教徒指針」「聖者の永遠の憩」の解釈を、ウェーバーの見得なかったバクスターの他の著書と照合して、ウェーバー解釈の誤謬を指摘すると同時に、ウェーバーがバクスターの中に見出したとするかれの倫理は、ウェーバーの主張するような市民倫理でなくむしろ重農倫理であることを解明した。では清教主義とは何か。これについては著者は、「禁欲」「厳格」などと等置して個人倫理の局面でとらえる通念ともなっている清教主義解釈を排斥し、「漠然たる反体制的態度」つまりひとつの「心的態度」と主張する。しかもこの態度は、資本主義精神を触発するものではなく、むしろ逆に、近代資本主義、近代英国社会成立期の底辺に、沈殿し、おし下げられていった思想であり、没落してゆくヨーマン達の吐息であり、絶叫であり、それはまた中世以来のアングロ・サクソンの武骨さ、素朴さ、偏狭、禁欲、神秘主義、排外性などの土着性をもつ思想であったとする。

最後に著者は、英国特有なものとしての経験論の発生過程を探ろうとする。即ち著者は外から来るヒューマニズムと英国内部のピューリタニズムとの拮抗の中から、第三者としてできたものが経験論であるとする。しかもこれを社会的・政治的關係においてとらえ、ヒューマニズムが主としてジェントリーに受容され、清教主義が主としてヨーマンリーに受容され、これに対して経験論は主としてブルジョワジーに受容されたのであり、そのフイゴの役割を演じたものこそ革命であると主張し、社会史・政治史・思想史の統一的把握を試みている。

論文審査の結果の要旨

近代英国については、内外の研究者によって、政治・経済・社会・思想の諸分野に、すでに多くの業績が積み重ねられてきた。著者は本論文において、従来の主要な研究成果を渉猟しつつ、史料によってこれを批判し、近代英国の成立期の政治・社会・思想についてそれぞれ独自の分析を行ないながら、しかも三者の有機的関連を明らかにしようとした。

本論文の成果としては、主として次の諸点をあげることができる。

(一) 政治的には国民国家の成立として把握される「近代英国」の国民意識が15・6世紀の国際関係、宗教改革を通して成立したことを明らかにした。とくに近代的な議会による「法主権の独立」が成立してきたことを強調したが、これは著者によってはじめて明らかにされた事実の一つとして評価することができる。

(二) トーマス・クロムウェルの近代英国成立に対する役割を解明し、政治におけるリーダーシップを強調し、さらにエリザベス1世においてその頂点をなす英国絶対王政の基盤を分析して、これが有力家族間の派閥均衡であり、イギリス革命が、従来主張されてきたような階級闘争でなく、むしろ有力家族間の抗争であったことを実証した。

(三) 16世紀英国の景気変動の原因を緻密な統計的研究によって monetary manipulation にあることを解明したが、この点も本論がはじめて明かにした事実で、高く評価されねばならない。

(四) この経済的分析をふまえて、近代英国のトレーダーが、従来いわれてきたようにヨーマンではなく、ジェントリーであることを明かにしたが、これもまた本論の功績の一つである。

(五) ジェントルマン＝イデアールの形成を解明し、それと関連して清教主義の本質を探究し、長く古典的価値をもちつづけてきたマックス・ウェーバー理論を逆転させたが、これは本論文中、最も精彩をはなつ部分である。

(六) 英国独自の経験論の成立過程を分析し、外来のヒューマニズムと英国内部のピューリタニズムの拮抗の中から生じたことと、それらの受容された社会層とを追求したが、おうむね当を得た見解といえる。

もちろん、本論が完璧なものとはいえない。とくにいわゆるジェントルマン論争は、各州の地方史研究が緒についた現段階からみると、著者自身も指摘しているように、将来著者の見解を若干修正すべき点生まれ得るかもしれない。しかしそれは本論文の欠陥というより、むしろ英国史学界の現在の極限における課題ともいうべきであろう。

以上審査するところにより、本論文は文学博士の学位を授与さるべき価値あるものと認められる。